



オリエンテーリングのナビゲーションスキルは、周辺領域のアスリートのリスペクトの的となっている。入間 OLC のチャレンジナビゲーションクラスには 50 人が参加した。レース前にナビゲーションのポイントを説明する田島利佳氏。

オリエンテーリングを支える二つの価値をブラッシュアップする研修会と講習会

JOA 主催研修会

選手が満足のいくレースを続けるために、日々努力が必要なように、イベントの魅力を持続可能な形で提供するためにも日々の努力が必要です。その努力はイベント開催に係わる多くの人によって行われていますが、努力を支える仕組みも欠かせません。

JOA では、オリエンテーリング大会の充実と、オリエンテーリングの社会的評価を高めることを目的として、本年度、2種類の研修/制度をスタートさせます。そのいずれも、リスクとナビゲーションというオリエンテーリングの本質的な価値に関係したものです。この二つの視点から見ると、オリエンテーリングをより深く眺めることができるでしょう。

情報やスキルを得ることはもちろん、努力する仲間に出会えることも研修の重要な意義の一つです。多くの方の参加をお待ちしています。

ナビゲーション インストラクター

山岳遭難の 40% を道迷い遭難が占め、その対策は急務とされています。地図読み・ナビゲーションスキルは、達成感が得られるスキルとして学習ニーズも高く、多くの講習が行われています。さらに、読図・ナビゲーションスキルは道迷いを防ぐだけでなく、登山計画、事前のリスク把握、リスクマネジメントの基礎ともなっています。

国民の代表的なレジャー活動である登山(登山人口は人口の 8-10% と推計されている)のリスクマネジメントに資することが読図には期待されているのです。

実際、オリエンテーリングの黎明期には、登山のための読図を磨くためにオリエンテーリングを始めた人が少なからずいました。先頃マスターズ世界選手権で日本人として事実上初めて世界チャンピオンになった多摩 OLC の高橋厚さんやトレイル 0 の普及に長年尽力された小山太朗さんもその代表的な存在です。

オリエンテーリング界は、今や他のナビゲーションスポーツはもちろん、登山者からもリスペクトされるナビ

ゲーションスキルという資産を持っています。JOA では、この半世紀に蓄積されたナビゲーションスキルをスタンダード化し、指導者「ナビゲーション・インストラクター」を制定することとしました。本制度が、アウトドアの安全に資することはもちろんですが、オリエンテーリングの社会的認知のためのツールとして広く活用され、多くのアウトドア関係者がオリエンテーリングに親しみ、普及の一助となることを期待しています。

ナビゲーションスキルのスタンダード化が必要とされるもう一つの背景として、山岳遭難対策の一つとして 2014 年に長野県でスタートした「山のグレーディング」があります。これは技術と体力で登山ルートをグレード化するものですが、明快な生理的指標に基づく体力レベルに対して、登山者が自分のナビゲーションスキルを知ることが困難でした。本制度はグレーディングとも対応して山のリスクコントロールに寄与すると同時に、地図を通じた新たな山の楽しみを広げることも目的としています。初級(グレーディングの B 相当)、中級(同 C 相当)、上級(同 ED 相当)で制定されたカリキュラムに基づいた講習を実施し、スキルレベルの認定を行える指導者を育成し

ます。

指導者認定のための研修は全12時間で、ナビゲーションスキルに関する概論、指導法実技、セミナー、講習コースと指導内容設定実技を含みます。受講資格は地図を使ったアウトドア活動30日以上以上の経験があり、ナビゲーション・読図の指導に興味を持ち、本認証の趣旨に賛同した方です。所定の研修と研修会のアシスタントを務めるOJTを修了し、所定の手続きによって認定されます。オリエンテーリングの指導者はもちろん、山岳ガイド、登山指導者、野外活動センター職員、青少年教育指導者（スカウトなど）、野外教育専門学校在校生、大学・高校山岳部指導者、オリエンテーリング熟練者、なども受講することが想定されています。

なお、現在オリエンテーリングの指導者資格を持つ方については、一部研修が免除される予定です。今後は、10月に日本山岳協会指導員、国立登山研修所アドバイザーおよび主任講師などの外部有識者による検討会議の実施、12月にはカリキュラム検討のための研修会を行い、2017年4月から認定制度をスタートさせる予定です。

大会のリスクマネジメントとコースプラン

いいイベントの条件は人によって見方が異なるでしょう。けれども、参加者が安心して参加できるリスクマネジメントのできた大会、正當に実力を評価してくれるコースの存在は、多くの人にとっていい大会の条件の上位に入っているのではないのでしょうか。

オリエンテーリングイベントのよし悪しはコースによって大きく左右されます。トレインに制約の多い日本では、その制約がコースによって緩衝されることもあれば、せつかくのトレインが台無しになることもあります。また、日常的に練習の難しいオリエンテーリングでは、年齢や経験による技術の積み重ねのためにも、イベントで適切なコースが提供される必要があります。トップ選手にとっても、よく練られたコースは、その実力を適切に評価するものとなり、それが選手のモチベーションにもつながります。

競技規則にも「コース設定の原則」が付録としてついていることも、オリエンテーリングにおけるコースの重要性を物語っています。その一方で、抽象的な原則では実際のコースを組む上での手がかりとしては十分ではありません。大会によっては、「？」と思わせるコースが組まれているのも事実です。

一方でリスクマネジメントについても、野外で観客も役員も見えない場で行われるオリエンテーリングは、一旦発生したリスクのダメージをコントロールすることが難しいスポーツです。それは、オリエンテーリングがイメージできる以上にリスクが高いということを意味します。しかし、その事実はあまり共有されていません。かつては雪中の大会で、低体温症でふらふらになりながらゴールした選手がいました。先頃もある大学クラブの練習の場で、転倒と思われる事態によって一時的な記憶障害に見舞われたオリエンテーリング愛好者がいました。その時は大事に至りませんでした。こうした事態が再び発生し、より悲惨な結末を迎えることがあっても不思議はないのがオリエンテーリングです、それに対する心構えと準備が必要なのです。

JOAでは、こうした現状を考慮し、よい大会の要件であるリスクマネジメント&コースプランに関する講習会を、本年度関東、関西、東海の3地区で実施することにしました。関西の講習会は8月26日に終了しましたが、関東

は12月23日に実施予定です。また東海についても日程が調整され次第、詳細についてJOAのウェブで情報提供します。

これらの内容については来年度以降も地域を変えて提供するとともに、オリエンテーリング大会を魅力的にするための情報提供と相互研鑽の場を提供していく予定です。



コースプランはよい大会の第一の条件ではないだろうか。講習会でのコースについて相互批評は、よいコースづくりについて学ぶ最高の方法である。



捻挫や打撲はオリエンテーリング大会では珍しいことではない。だが、香港のアジア環太平洋選手権（2006年）では、あわやという事態が発生した。トレイン内にあった深さ5mほどの穴に二人の日本選手が転落してしまったのだ。二人とも命に別状はなかったものの、脚の粉碎骨折という大けがを負った。

（村越 真）